令和５年度国際教養学部卒業式式辞

まずは２０２０年に入学したみなさんへ
　みなさんは、コロナ禍での大学生活のスタートでした。入学式がないスタートの中で不安も多かったと思います。１０月のグローバルイシュー演習の第一回授業で、はじめてみなさんが顔を合わせました。「本当に国教の１年生がいるんだ」と、みなさんの誰かがいっていたのを覚えています。バーチャルではなかったですね。
メディア授業から対面授業へ。本来ならば対面授業が当たり前ですが、そうではない経験をみなさんはしました。今後みなさんが年齢を重ねて、このことを振り返る思い出になる一つなのかもしれません。つらい経験でしたが、特別な経験ともいえます。

次に過年次での卒業を迎えたみなさんへ
　少し時間がかかったかも、と思うこともあるでしょうが、時間がかかったのも悪くはないかなと思うときが来ます。何も予定通りにいくことが大事なわけではないのです。何かしら苦労をし、悩んだことがあっても、やりきれたなと思うことの価値が、時間がたつにつれ、自覚化されるでしょう。遠回りではありません。人の歩く道やかかる時間はいろいろなのだと思ってほしいです。
ここにいるみなさんは、世の中の大きな変化の中で過ごした大学生活であったと振り返り、これから年齢を重ねながら、大学生活を思い出せるようにと願います。

さて、卒業するみなさんにふたつだけ、簡単にお伝えします。
　ひとつは、「気づきがなければ、学びの意味はない」ということです。
学びというのは気づきです。その気づきをいかに誘発するか。
「気づき」というのは、疑問からはじまるものです。その疑問を持つ感受性はこれからも磨いてほしいと思います。　「世の中、こんなものでしょう」に陥らない自分でいてください。
そのためには「こうじゃないといけない」という硬直化したルーティンから、自分を解放する心がけをもってみましょう。
「これが当たり前」は、クリエイティブではないことと同じ意味であると考えてください。

もう１点お伝えしたいことがあります。
　自分を、自分の命を大事にして、生きてください。
自分の命を大事にすることを少し心の中にそっと思っておいてほしいのです。そうすれば、みなさんは、みなさんの周りの人たちにも大事に接することができます。
自分を守るのは、自分をいたわるのは、自分です。そこから他者を大事にする気持ちが生まれます。当たり前のことではあるのですが、当たり前すぎて忘れてしまうこと。お伝えした

いと思います。

　さて、新しい世界にみなさんは進みます。
国際教養学部という名称もありますが、英語名のCollege of Liberal Arts and Sciencesという名前を思い出して前に進んでください。
みなさんは、幅広く文系、理系という枠組みとは違うカリキュラムの中で過ごされたことを思い出してもらえればと思います。みなさんも戸惑いを持ったことがあるでしょうが、教員も戸惑いの中カリキュラムを考えてきました。これからもこの学部は型にはまらないカリキュラムを意識して学びの場を作っていきます。
文系、理系という枠組みで自分を型にはめず、何でも柔軟な姿勢で挑戦できる人であってほしいと願います。

本日は、本当におめでとうございます。

令和６年３月２２日
千葉大学　国際教養学部長　和田健